

キラリ! 地域おこし協力隊

新入隊員紹介!



1_ 前職の営業マン時代、越境EC広告に関する情報提供のセミナー登壇など多数経験しました 2_ 昨年12月に開催した「カンファレンス@遠野」。全国の起業家約70人が遠野に集まり、ネットワークを強化しました 3_ 初めて訪れた「ワサビ田」。きれいな水とワサビにしばらく見とれてしまいました。ワサビの豆知識も教えていただき、ワサビ収穫ツアーなどが実現できたら面白いかなと考えました

遠野に移り住み活動する「地域おこし協力隊」の活動の様子や関連イベント情報などをお伝えします。

新たな隊員が仲間入りしました!

昨年12月、新たに着任した山岡謙志(けんし)隊員(神奈川県出身)を紹介します。

Q 遠野に来る前はどんなことをしていましたか?

大学卒業後、東京都内と大阪で仕事をしていました。職種は営業マン。商社や人材派遣会社、広告代理店の営業をしてきました。電話連絡「テレアポ」を1日250件する日もあって、ハードな営業を経験したこともあります。

Q 遠野に来てからどんな活動をしていますか? 所属するネクストコモンズラボが開

催したイベント・カンファレンス@遠野の運営メンバーとして活動。全国の起業家さんの活動をサポートしました。個人では、宮守町達管部のワサビ農家さんを訪問。課題と展望をお聞きし、今後、協業できそうな可能性を感じました。

Q 今後の目標を教えてください。

前職の経験を生かして、遠野の物産と観光資源のPRを行っていきたくと考えています。現在は、菊芋を使った自社製品開発を検討中。菊芋農家さんとお話しできれば嬉しいです。皆さんからのご連絡お待ちしております。

◎連絡先 080-6713-2552

※「遠野で起業に挑戦中!」は、本号からタイトルを変えてお伝えします

姉妹都市締結35周年記念 訪問市民ツアー

伊・サレルノ市と深める友情

イタリア・サレルノ市との姉妹都市締結35周年を迎えた昨年、市民ら15人がサレルノを訪れ、両市の変らぬ友情を確認しました。

市民ツアーは、昨年11月30日~12月6日の日程で実施。現地では、本田市長の親書をサレルノ市のヴィンチェンゾ・ナポリ市長に伝達。両市の交流を支える遠野親善大使とも再会し、絆を深めました。両市の交流は、1982年制作の映

画「遠野物語」(監督・村野鐵太郎氏)が同年開かれた第35回サレルノ国際映画祭でグランプリを受賞したことから始まりました。同映画は、『遠野物語』のオシラサマを題材に、遠野の風土や歴史、文化を色濃く描いた作品。サレルノ市民に深い感銘を与えました。その後、1984年8月8日に姉妹都市締結。伝統や芸術などを通じて交流し、友情を育んでいます。



1_ 遠野親善大使アンナラウラさん(中央)とツアー参加者 2_ 石田久男市民センター文化振興担当部長(左)が本田市長からの親書をサレルノ市長(右)に伝達



遠野人

★筆者 木瀬 公二

遠野文化研究センター研究員、朝日新聞・社友記者。1948年東京生まれ。73年朝日新聞入社。元朝日新聞盛岡総局長。08年に遠野部に移住。著書に遠野物語関連の『119のはなし』など。



遠野文化研究センターの活動に興味を持っていただけるような情報を、お届けしています。今回は、建築家・安藤忠雄さんによる本の施設についてです。

2019年の正月早々、大きな贈り物が遠野市に届いた。世界に知られる建築家の安藤忠雄さんが、子どものための本の施設をつくってくれるというのだ。安藤忠雄と聞いて、ピンとくる人はそれほど多くはないと思う。私も名前を知っている程度だったが、昨夏、偶然見たテレビですっかり認識を改めさせられた。

その番組で、大阪を歩いていた欧州の夫婦が、何を目的に来日したかと聞かれて「安藤忠雄さんの建築物を見るため」と答えたのだ。わざわざ10時間以上も飛行機に乗ってきて、数日間の滞在期間中に何軒もの安藤建築を見て回ると言った。それほど魅力的な建物をつくる人物なのかと驚き、建築物が誘客につながっている事実にも驚いたのだ。



旧三田屋を視察する安藤氏(右から2人目)

その数日後のトーク番組では、デザイナーのコシノヒロコさんが「私の家は安藤忠雄さんにつくってもらったの」と話し、「とても高額だったので、その分を必死に

仕事をした」と嬉しそうな顔で話していた。コシノ宅を知る遠野文化研究センター顧問の西館好子さんは、コシノさんが「住み心地は抜群」と大絶賛したのを聞いている。姉妹都市のイタリア・サレルノ市長も遠野市職員に「安藤忠雄先生はイタリアでも数多くの建築物を手掛けており、とても有名です」と言い、遠野市に計画される安藤建築に大変な関心を示したようだ。

そんなすごい人が、市中心街の旧三田屋を改築して「東日本大震災で被災した子どもたちのため」の本の施設を建ててくれるという。着工は8月で、完成は震災10年になる来年3月の予定だ。安藤さんは「東北復興のシンボルとして、子どもたちの未来のために造

る」と、昨夏の遠野市での講演会で言っており、それを実現に移す形になる。

安藤さんの「子どものための震災復興」の熱意は並大抵ではなく、知り合いの指揮者の小澤征爾さんやノーベル物理学賞受賞者の小柴昌俊さん、サントリーの小柴昌俊社長、ユニクロの柳井正社長らに声をかけ、年間一口1万円を10年間出してもらった「桃・柿育英会」を設立している。そこから被災3県の子供たちに、返済不要の奨学金を10年間贈るため、岩手県はすでに約16億円を受け取り、子どもたちが学んでいる。その時に寄せた「被災地の子どもたちへ」というメッセージの中で「日本の未来は、子どもたちの元気と創造力にかかっています。苦しみや悲しみを乗り越えた子どもたちが、再び笑顔を取り戻し、そして学びを得て自立して成人すれば、きっと日本を引っ張る、強い力となります」と記し、読書の大切さを訴えていました。

その流れの中で本の施設計画が持ち上がり、赤坂の憲雄遠野文化研究センター所長や西館好子顧問らの尽力で、震災直後から献本活動を続けていた遠野市を選んでくれた。遠野市のためにつくってくれるわけではないが、ここを中核施設として街中の賑わいづくりにも活用できそうでワクワクする。

問題は、贈られる本の施設の維持管理費だ。どうすれば運営しているのか。どういう施設がいいのか。市民を挙げての知恵の絞りどころだと思ふ。いつの日か、子どもたちの笑い声が遠野の里に響くことを思い描き、みんなで力を出し合い、海外の人が「この施設を見に来日した」と言うような素晴らしい施設にしていきたいですね。



旧三田屋の外観

★問い合わせ:遠野市東館町3-9(遠野市立博物館内)/TEL:60-2800/FAX:62-5758/MAIL:tono100@city.tono.iwate.jp